正義と葛藤

大類俊祐

登場人物

鈴木（すずき）　配属２年目の警察官。
富樫（とがし）　鈴木と同期の警察官。
渡会（わたらい）　鈴木と富樫の上司。課長。
加藤（かとう）　交番に突如訪ねてくる一般人。高校生。

これは、スマートフォン及び携帯ゲームアプリが世に出始めてきた頃の話である。
とある町の交番。もうすぐ正午の時間。渡会がひとりで交番に待機していた。

渡会　ふあああぁぁ。暇だなー。あっ！そうだ。暇つぶし。暇つぶし♪

渡会、ポケットからスマートフォンを取り出し、ゲームをし始める。
そこへ、パトロールに行っていた鈴木と富樫が帰ってくる。

鈴木・富樫　ただいま戻りましたー。
渡会　（画面を見ながら）うむ、ご苦労さん。
富樫　課長。もうすぐ１２時になりますよ。飯食いましょう。俺腹減りました。
渡会　（画面を見ながら）おう、そうだな。
鈴木　・・・・・・・・

鈴木と富樫は交番内にある休憩室に入り、予め持ってきた弁当を机の上に出している。
渡会もスマートフォンの画面に集中しながら休憩室に入ってくる。

富樫　いただきまーす。
鈴木　いただきます。

渡会は画面に集中しながら弁当を出し、食べ始める。

富樫　うんめー。あっそういえばこの前のロンドン五輪！すごかったよねー。見た？
鈴木　うん！見た！　レスリングの吉田沙保里と伊調馨がともに３連覇！生で見たかったなぁ。
富樫　あと、卓球の女子もすごいよね！平野と福原と石川！
鈴木　そうそう。銀メダルだもんね。
富樫　こっちも思わず興奮しちゃってね。

鈴木　特に愛ちゃんは小さい頃から知ってるから、オリンピックでメダルという小さい頃からの夢が叶って、思わず泣いちゃったよ。
富樫　いやあ、オリンピックは最高だ！ね、課長。
渡会　（画面を見ながら）うん、すごかったね。

少しだけ間

鈴木　課長。ちょっといいですか。
渡会　（画面に集中）
鈴木　課長！
渡会　わっ！びっくりした。何だいきなり？
鈴木　食事のときくらい、スマートフォンを操作するのやめてもらえますか。
渡会　ダメ！いまいいところなんだよ。
鈴木　さっきだって、スマートフォンを持って画面を見ながらこの部屋に歩いてきましたよね。危険だと思うんですけど。
渡会　そうか？普通じゃないかな？
鈴木　とにかく迷惑なんでやめてください。
富樫　おい、どうしたいきなりムキになって。
鈴木　別にムキになってないよ。
渡会　・・・やだ。
鈴木　え？
渡会　だって楽しいもん、このゲーム。今やってるのはキャラクターを見つけて、バトルして、成長させたり、面倒見たりするゲームなんだよ。ほら昔流行った「たまごっち」とか「デジモン」とかと同じ類だよ。お前ら世代だから分かるだろ？
富樫　懐かしい！子どもの頃、すげーやってました。
渡会　あれってドット絵だったわけだけど、スマホになって画面の質が上がって、家の中でなくても、テレビゲームができるような感覚になってるわけよ！これすごく画期的だよね。作った人を褒め称えたい。
富樫　そんなにハマるんですか。やりたくなってきたなぁ。
鈴木　ダメだ！とにかく迷惑なんですよ。
渡会　さっきから迷惑って言ってるけど、誰が迷惑してるの？
鈴木　私です！
渡会　富樫、お前は迷惑と思ってるのか。
富樫　いや全然。
鈴木　ちょっと！
渡会　よし、俺自身も迷惑と思ってないから、２対１だな。はい、俺の勝ち！

鈴木　数の問題じゃありません！
渡会　じゃあ、何の問題だ？
鈴木　私はただ、スマートフォンは危険だと言いたいんです！
渡会　危険？スマホが？なぜ？
鈴木　さっきの画面見ながら歩く行為って、今回は距離が短いからいいですけど、長い場合は人とぶつかる可能性ありますよね？
渡会　そんなの気をつけりゃあ良いだけじゃん。
富樫　うん、俺もそう思う。
鈴木　ぶつかった人が怪我をしたらどうすんですか？
渡会　そんな大げさな。人ごみの中でスマホ見ながら歩いたら、さすがにぶつからないように気をつけて歩くよ。
鈴木　あと、そのスマホって略すの辞めてください。『スマートフォン』です。
渡会　どっちでも良いだろ。細かいなお前は。

次の瞬間、大きな音が聞こえてくる。交番の入り口側からだ。

3人「？？？」

3人は慌てて休憩室を出た。すると一人の男性が倒れていた。意識はある。近くにはその男性のものと思われるスマートフォンがあった。

加藤　いててててて
富樫　こらー、何やってんだ！
加藤　えっ・・・ああ、おまわりさん何で？
渡会　ここは交番だ。そこの棚にぶつかったんだな。怪我はないか？
加藤　へえ、大丈夫です。
渡会　一体どうしたんだ。交番の中で棚にぶつかるって。
加藤　私、スマートフォンで地図を見てたんです。そしたら迷っちゃって、画面をつい集中して見ながら歩いてきちゃったら棚にぶつかったと。わざとじゃないですよ。
鈴木　わざとじゃなくても、取り返しのつかないことになるかもしれないんですよ。棚だからよかったものの、これが人とぶつかったり、あなたの怪我が大きかったらどうすんですか。
加藤　すいません・・・
富樫　どこに行きたいんですか。
加藤　あのー、パルク美術館に行きたいんですけど、どこですか。
富樫　ああ、この美術館は近くですよ。ちょっと案内に行ってきますね。

鈴木　ん？これ、生徒手帳・・・ちょっとまった。
富樫　なんだよ。
鈴木　君、高校生だね。ピアスしてるじゃないか。
加藤　はい、してますよ。それが何か？
鈴木　校則で禁止されてるだろ！外しなさい。
加藤　何で学校の外で注意されなきゃ行けないんですか。それに夏休み中だし、どうしようと勝手でしょ。
鈴木　いいから外しなさい。
加藤　やです。
鈴木　何だと！
加藤　おまわりさんにピアスで注意される筋合いは無いです！ここは学校じゃないし。
鈴木　学校に連絡するよ。
加藤　何でピアスつけるとダメなんですか？
鈴木　えっ？校則だからでしょ。
加藤　そうじゃなくて、なぜそれが校則になっているかの理由ですよ。
鈴木　それは・・・学校の風紀が乱れるし、迷惑だから。
加藤　学校の風紀って何ですか？誰が迷惑するんですか？
鈴木　学校の評判が下がると思うし、親御さんが迷惑する。
加藤　親は『かっこいいね』て言われてるし、ピアスOKな学校って世の中たくさんありますよね。さて、それを踏まえて、何故ピアスをつけるとダメなんですか。
鈴木　・・・・・・
加藤　ほら答えられない。だからピアスをつけてるんですよ。校則には書いてあるけど、その理由がはっきりしないものについては、自分の判断で校則破ってます。理由がはっきりして、自分も納得すれば、ピアスはちゃんと外します。
鈴木　ええ！ただのわがままじゃん。
富樫　いやあ、気持ち分かるなぁ。
鈴木　はぁ？何言い出すんだよ。
富樫　確かに学校の先生って校則だからって言うだけで何故それが校則になっているのかを教えてくれないよね。だからちゃんと教えない先生が悪くて、君は悪くない。正論だと思う。
鈴木　いやいや、ちょっと待っておかしいよ。
富樫　もういいだろ。じゃあ課長、改めて案内に行ってきます。
渡会　ああ、頼む。

富樫、加藤を連れて出て行く

鈴木　何なんだよ高校生の癖に。
渡会　まあまあそう熱くなるな。
鈴木　課長！これで分かりましたね。スマートフォンに熱中しちゃうと怪我する恐れがあるんです。スマートフォンが危険だといういい例ですよ。
渡会　いや、スマートフォンは危険じゃないよ。
鈴木　えっ
渡会　そんなこと言ったら、車だってそうだろ。交通事故が毎年起きてるけども、だからといって、『車＝危険』ということになるか？もしそうなら、車を生産する会社はつぶれているはずだし、購入者も減るはずだ。しかし、そうなってないのは何故だ？
鈴木　それは・・・
渡会　結局『車＝便利』なんだよ。車はかなり便利な移動手段だからね。自力で移動する手段は車以外だと自転車か徒歩しかないからね。だからいくら交通事故が起きたって、車を生産する会社はつぶれないし、購入者も減るわけではない。スマホだって便利だからなくならない。包丁やナイフだってよく凶器に使われるから危ないと思われがちだけど、料理に使うからなくならない。そうだろう？
鈴木　そうですけど、スマートフォンが危険じゃない理由になってませんよ。
渡会　いちいち車が危険、スマホが危険、包丁が危険、って言ってたら、じゃあ何が安全なんだよ。『危険』の2文字に怯えてたら、この世からモノが無くなるぜ。だから、モノを作ってくれた人々に感謝しなければならない。
鈴木　・・・・・・・・・

ここで、富樫が帰ってくる。

富樫　戻りましたぁ。・・・あれ？まだ課長に文句を言ってる感じか。
鈴木　別に言い合ってないよ。
渡会　まあ、そういうわけだ。スマホは脅威じゃないよ。
鈴木　ちょっと待ってください。
渡会　何だ。まだ何かあるのか。
鈴木　もし車の運転中にスマートフォンを操作して、事故を起こしたらどうするんですか。
渡会　さすがに運転中にスマホを操作しないよ。そんなバカじゃない。
鈴木　そのバカが本当にいたらどうすんですか。
富樫　それに、カーナビとかDVDを見ながら運転ってよくするじゃん。それと同じで、スマホも操作はしないけど、見ながら運転は普通にアリだと思うよ。
鈴木　ちょっと待て、何故お前はさっきから課長の肩を持ってるんだ？
富樫　俺はただ、事実を述べてるだけだ。
渡会（時計を見て）おっそろそろ昼休み終了だ。準備しろよ。俺は本庁に寄るから、ここは

任せたよ。

渡会、交番から出ていく

鈴木　おい、どういうことだ。
富樫　・・・何がだ？
鈴木　お前、俺と気が合うと思ってたのに。正直驚いてるよ。
富樫　今のスマホの件、些細なことじゃないか。そんなことでいちいち警察が出動したらきりが無いよ。
鈴木　些細だと？場合によっては大事だぞ！
富樫　それに、今の日本の法律でスマホを規制するものは無いぞ。
鈴木　確かにそうだけど・・・
富樫　だから課長の言うように、スマホは悪くない。スマホを持っている人も悪くない。お前が悪いと思っても、誰も裁けない。法律が無いから。
鈴木　・・・見損なったよ。
富樫　ん？
鈴木　見損なったよ。去年のお前なら、絶対俺と同じことを言っていた。一番最初の頃、俺になんていった？『例え些細なことでも、重大な事故になるかもしれないから、悪いものは悪いと訴えていきたい』と言ったんだぞ。それがなんだよ、今は屁理屈言うだけじゃないか。
富樫　屁理屈とは何だよ！スマホを規制する法律が無いのは事実だぞ。
鈴木　とにかく、お前は悪い意味で変わってしまったよ。
富樫　お前こそ、そういう哲学的に考えるところ、細かいところ、正義感丸出しなところ、何も変わんないな。
鈴木　じゃなきゃ警察官なんかやってられないよ。
富樫　そんなお前にもう嫌気がさしてね。真面目すぎるっちゅうか。ついていけない。
鈴木　・・・・・・
富樫　世の中には、正義だけではうまくいかないこともあるんだ。合理的に判断する力がないと、一生出世できないぞ。
鈴木　お前、出世したいのか？
富樫　もちろんだ。結果を出して出世したい。そのためには、まず課長を味方につけないと。課長の意見に同調しないとね。これも出世のための合理的判断力ね。
鈴木　・・・・・・
富樫　スマホの件でお前がいろいろ言うのは分からんでもない。でも、取り締まるのは無理だ。正義だけでは無理なんだよ。

間

鈴木は日記を習慣付けていて、その日の夜の彼の日記にはこう記されていた

今日は、悲しい出来事があった。職場の上司と同期にスマートフォンの恐ろしさが分かってくれなかったことである。2人は正論っぽいことを言って、スマートフォンは危険じゃないみたいなことを言っていた。確かに、言い分は理解できるが、俺の言い分が全く受け入れられないのは何故なんだ！あらゆる可能性を想定して動くのが警察官じゃないのか！何か間違ったことを言ったのか！俺はどうしても納得できない。絶対数年後、スマートフォンは若い人たちを中心に普及するだろう。そのとき、俺の言ったことが正しいことが分かるだろう。アプリも普及して、ますますスマートフォンに魅力を感じて、周りが見えなくなるだろう。人との接触、死亡事故、そうしたことが全国ニュースに取り上げられるだろう。そうならないように、今のうちから俺は今後もスマートフォンの脅威について訴えていきたい。

そして数年後、スマホに関する様々なトラブルや事件が多発。
鈴木のいってることが正しかったことは言うまでも無い。

【終】